

特論 学校を糾弾するまさに
大人と子どもの関係史の視点から

十九世紀半ばの一枚の絵がある(図7参照)。これは、産業革命後のイギリスのある学

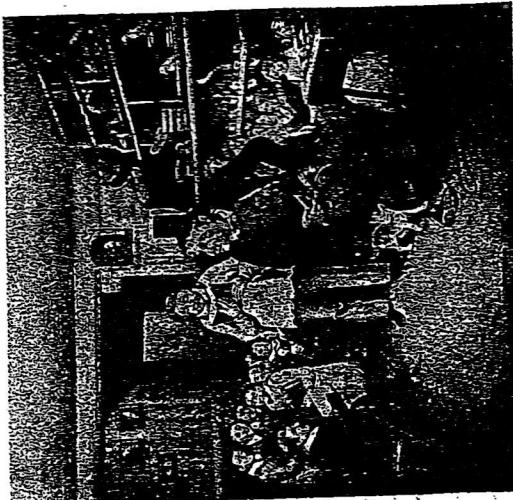


図7

校の教師、ジョン・バウンズを描いたものである。解説によると、彼は一八三〇年代にボーリマスで、貧困家庭の子どもたちに教育を施し、一般に「貧困児童学校運動(Fagged school movement)」の創始者とみられている。その運動の社会的背景の詳細はぬきにして、この絵が興味深いのは、ここに描かれている大人と子どもの関係が、学校の教師・生徒関係と徒弟制の親方・徒弟関係の中間的形態を示していること。それによって、両者の対照的な姿を示唆していることである。

絵にあるように、バウンズは、靴作

特論 学校を糾弾するまさに

165

特論 学校を糾弾するまさに

166

りの仕事をしながら、子どもたちの方をやりかえり、読み方を教えている。靴作りを教えているのではないか。当時はこのようだ、いわば副業として教師をつとめることが珍しくなかった。そのため、この絵は、専門家でないレベルの低い教師の例として紹介されるのがふつうである。しかし、そのような、教師に専門性を期待することが自明であるとする目には、この半身に構えた姿勢にひそむ重要な意味が読みとれない。

この姿勢を徒弟制の場合と比べてみると、その違いがはつきりする。徒弟制においては、まず子ども一人か二人と小さなじらうじらうもあるが、なによりも親方は、子どもの方ではなく、自分の仕事を向いている。そして子ども=徒弟は、親方の横か後について、その仕事ぶりを見習っているはずである。親方は教える人なのではなく、生産者であり、徒弟はその後継者である。教えることは、職業を遂行する過程で付随的に起じるにすぎない。

学校の場合は、それと逆に、教師は、金銭的に子ども=生徒の方を向く。そして教えるという仕事を専念する。ところが生徒たちは、教師のその教えるという仕事を見習うわけではない。読み書き算いや、地理、歴史を学ぶのも、教師になるためではない。生徒は、少數の教員志望者を除いて教師という職業の後継者ではないのである。

このように、大人と子どもの関係は、徒弟制と学校では、職業的連續性とそれに対する姿勢および視線の方向において、全く対照的である。バウンズの半身の構えは両者の過渡期をあらわしている。徒弟制は工業分野でみられる制度だが、農業や商業の場合でも基本的には同じことがいえる。産

業革命以前の大部分の子どもは、学校においてではなく、それぞれの仕事が行なわれている現場において、親が親代りの大人の仕事の後継者として、その仕事を見習いながら、一人前の大人となつた。そこには、同じ仕事を共有する先達と後輩の関係が成り立つ基盤がある。それが大人の権威を支える現実的根拠であった。そういう関係をあてにできないところに、近代学校の教師の役割の難しさがあるのではないか。つまり学習の強力な動機づけになるはずの職業共有の意識を子どもに期待できず、また人間にどうしていちばんやさしく見習いという學習形態を利用したくい悪条件の下で、何とか教える役割を負わされている、じらうことである。

THE HIDDEN CURRICULUM

Features of the hidden curriculum

Privileges and responsibilities given to older pupils.

School rules, detentions and suspensions, rewards like merit badges, prizes, good marks, etc.

School assemblies.

Males and females often playing different sports, having different dress rules, and being counselled into different subjects, further education courses, and careers. Many teachers having higher expectations of boys than girls and paying them more attention.

Competitive sports and competition against each other in class rather than cooperating together. Students being tested individually – being encouraged to rely on themselves rather than others.

Respecting authority of teachers regardless of what they say or do. Pupils always having to justify where they're going and why, and do as they're told.

Punctuality/being on time – time belonging to the school, not the pupil.

Concentrating on schoolwork, whether or not it's boring and whether or not you want to do it.

Value being placed on hard work and getting on.

Grading by ability and exam success/failure.

What is being taught

Respect for elders.

Conformity to society's rules and laws, whether you agree with them or not.

Respect for religious beliefs.

Males and females are expected to conform to gender stereotypes, with males as workers and 'bread-winners', and women working mainly in the home or in a narrow range of 'female occupations' which are often extensions of their domestic role.

Workers have to compete for jobs and wages. Individuals should stand on their own two feet – not join with other workers.

Respect for those in authority, such as bosses at work and the police.

Good time-keeping at work – the employer pays for the worker's time, so it belongs to the firm, not the worker.

Workers have to accept boring, menial, repetitive jobs.

Everyone can make it to the top if they try hard enough.

The differences in pay and status between social classes are natural and justified – those higher up are more intelligent and better qualified.

教育原論リアクション（第4回、5月12日） 学校について考える

教育原論リアクション（第4回、5月12日） 学校について考える

1 前回リアクション（4月28日）を読んでの感想

経年次第で何を表しているのか？詳めていたり人によって思はれる感じがした。

2 学校は、行かなくてはいけないところか。（1番：モラ思）

小学校や中学校は義務教育なので絶対に行かなければいけないと思います。勉強を学ぶための外にも社会のルールを守るためにも学校へ行く必要性が高まっています。高等学校は行かなくていいと思います。

3 いじめ自殺（学校へ行くといじめられ、自殺したくなる）の場合も、学校へ

・義務教育→親が子供は学せいといけない
・自殺してまだ時の責任
・自殺したくなる程、苦いのなら無理で行かなくていいと思います。
学校は決していけない、命は一つだけだからいじめられてもおがんばりたいと思います。

4 学校の起源は（公教育；西洋＆日本の学校の成り立ち；テキスト14～18頁）

西欧（144~19） 日本（1592）
・コメニウス（1592）→富貴の差がない
・ヨーハン・コンドレーリー（1743）→社会生活を送る上に必要な知識
・デューイ（1853）→共同社会

5 学校の機能は（学校に違うことまで得られるものは何か）

生きいく上で必要な知識や技能を見にかける。勉強をする。
他人と話すコミュニケーション見にかける。（人間関係としての成長）
社会のルールを守るために、集団生活を行つ。（集団生活のルール、協調性）

6 潜在的カリキュラムとは何か（テキスト 94~95 頁）

児童、生徒が学校で学ぶ生活するもの
①隠在的カリキュラム
→潜在的カリキュラム
自然に学ぶもの。
(例) 遊戯ばい習慣・時間厳守。能校を形成

7 教師の起源から考えると教師の役割は何か（プリント 富沢康人参照）

仕事として児童や生徒に教えるものではなく、児童や生徒が自ら学んでいます。
・新規制度→(例)父の私教→現在その学びを手助けすることができます。
・規則制度→(例)母の私教→現在規則が生徒に教えられます。

8 ホームスクーリングについてどう思うか（学校ではなく、家で学ぶ）

あまりにも大きさの理由がある場合は、家庭性や一貫性なども学ぶ場所なのです。

9 他の人のコメントの感想

(筋スイズ) → 1番の考えに感動しました。3番はその通りだと思います。
(木暮裕生) → 学校には行くことが命の方が大切という意見に賛成です。
「儿童は目的的上学ばせるのが教師の役割というのも良い考え方だと思います。

1 前回リアクション（4月28日）を読んでの感想

同じ文を読み、同じ授業を受けていたとしても、人それぞれ違うところに感じるが、色々な意見を参考にしてよかったです。

2 学校は、行かなくてはいけないところか。

行がなければならぬといつぱり、学校にしゃり行がなければ、将来就職しても金をつくらんといふのです。だからいいじめの問題なども、ちゃんと逃げ場あつたからです。

3 いじめ自殺（学校へ行くといじめられ、自殺したくなる）の場合も、学校へ

・時的に体をもといつ葉もあきが、それでは復活することはほほないし、根本的な原因を解決せられないのが、なぜか積極的に、加害者をやめようとしているからです。

4 学校の起源は（公教育；西洋＆日本の学校の成り立ち；テキスト14～18頁）

日本（1592） 日本（1945）
・富貴の差がない
・薬物や暴力（暴力）
・日本の人間性
→「日本、どの辺の能はが

5 学校の機能は（学校に違うことまで得られるものは何か）

学校
・学習
・人間性
・社会生活の準備
・人間関係の構築
・精神と精神を以
内に出すか、生活リズムを狂わせまいづつに満たす機能が
日本は学校制度の下で學校の機能は

6 潜在的カリキュラムとは何か（テキスト 94~95 頁）

学校
・学習
・人間性
・社会生活の準備
・人間関係の構築
・精神と精神を以
内に出すか、生活リズムを狂わせまいづつに満たす機能が
日本は学校制度の下で學校の機能は

7 教師の起源から考えると教師の役割は何か（プリント 富沢康人参照）

仕事として児童や生徒に教えるのが、新規制度→(例)父の私教→現在その学びを手助けすることができます。
規則制度→(例)母の私教→現在規則が生徒に教えられます。

8 ホームスクーリングについてどう思うか（学校ではなく、家で学ぶ）

それならアリースクーリングと作る感じになります。

9 他の人のコメントの感想

→考えがしっかりしてある。とてもスマートだ→ 徒歩制度→ 現在
→ とても書いた感じがいいです。
(土井) → 1番は自分の学ばせるのが教師の役割というのも良い考え方だと思います。

